

総合基礎実技アーカイブ

平成29年度 活動報告

総合基礎実技のアーカイブ化の作業は、今年で4年目を迎えた。このカリキュラムは当初「共通ガイダンス」と呼ばれ、専攻制から工房制への移行を唱えた1970年の大学改革案に淵源を持つ（*1）。改革案は実現されえなかったが、総合基礎実技は、造形芸術全分野に通底する「基礎」の探求と、学びにおける学生の自主的な姿勢の育成をめざして、その後も半世紀近く存続してきた。総合基礎実技が促す学生・教員間の分野を越えた交流は、本美術学部の芸術教育の基盤にある。だが、半年ごとに研究室がたたく体制ゆえ、授業内容の一貫した記録の継承が困難で、内外からその必要性が指摘されて久しかった。芸資研に支えられたこのアーカイブ化の作業によって、ようやく総合基礎実技の歩みの全容の把握と継承の課題に取り組めるようになった。

しかし、財政的理由から作業時間は限られ（今年度はのべ132時間）、昨年度から効率アップのため、2名の非常勤講師が臨機応変に集中して作業する体制をとっている。今年度は、村上花織・本山ゆかりの2名が2018年1月22日から2月半ばまでの月・火・水の10～18時に作業を行った。

今期の作業の特色は、1970年代から順に授業記録をデジタル化する従来のやり方に加えて、
(1) 昨年度（2016年度）と今年度の未整理の膨大な授業記録のアーカイブ化に取り組んだこと、
(2) アーカイブ化にあたって、一つ一つのデータにIDを振り分ける方式を採用し、すでにアーカイブ化の終わったデータもその方式で整理し直したこと、の2点である。ID方式は、芸資研でダムタイプのアーカイブ化において採用されている方法で、ファイル名に情報を記載するのではなく、数字と記号のみで識別できるIDを振り、[ID一覧]という表形式の別ファイルで情報を一括管理する方法である。

具体的には、授業記録は、[名簿] [カリキュラム冊子] [作品記録冊子] [スライド] [同窓会誌『美』]の5項目からなり、データの種類には[書類] [写真] [映像] [学生の提出書類] [音声]がある。内容面では、[準備] [課題] [研修旅行] [総基礎展] [会計] [学生アンケート] [その他資料]がある。それぞれにIDを振ってファイル名とすることで、例えば、[1972指導計画1.tif]というファイルは[s47_01_0008.tif]となる。個々のファイル名だけでは内容が識別できなくなるが、ID一覧ファイルで全容を見渡せ、他年度との比較や、全体から部分へのアクセスが容易になる利点がある。

昨年と今年の資料整理への取り組みは、実際の授業にあたって、できるだけ合理的で有効な記録方法を検討しておくことにもなる。すなわち、アーカイブ化の作業は、単に過去の資料の整理に留まらず、現在の授業にもフィードバックする。それは、カリキュラムの構成や授業進行における若い非常勤講師の関与度を高め、より効果的なカリキュラムづくりにもつながるだろう。

さらに今年度は、総合基礎実技のあり方そのものを公開でディスカッションする機会を設けた（*2）。情報社会の進展とともに変容する学生の経験や感覚にも柔軟に対応するたしかな基礎教育のあり方をめぐって、さまざまな立場からじかに意見を交えたことは、総合基礎実技が始まって以来、初めてのことと思われる。今後も、アーカイブ作業と並行して、こうしたオープンな反省と検証の場の設定を続けていきたい。

井上明彦（美術学部教授）

*1 『芸術資源研究センターニューズレター』第3号，2017年3月発行，9頁

*2 フリートーク「総合基礎って何なん？」2017年11月28日，芸術資源研究センター・カフェスペースにて